

いるか

星野冴子

## いるか

---

「いるか」

星野冴子（ほしのさえこ） 作

一匹のいるかがおりました。

ある時、いるかは恋をしました。小さな魚でした。

魚は、とても優しい心をもっていました。

いるかは、魚のそばにいと幸せでした。

ふたりで海のなかを泳いで、いろいろな話をしました。

楽しくて楽しくてしかたありませんでした。

いるかは、すっかり魚に夢中になりました。

あんまりにも恋に夢中になるあまり、いるかは食べることを忘れてしまいました。

というよりは、何も食べられなくなってしまったのです。

いままでは、たくさんの魚をお腹いっぱい食べてきたのですが、小さな魚に恋するあまり、食べることが、つらくなってしまったのです。

いるかは思いました。

「ああ、ぼくは、こんなにたくさんの命を食べてきたのだな」と。

小さな魚は、いるかが何も食べていないのを知っていました。

仲間と一緒にいることも忘れ、自分のそばにいとすることも知っていました。

小さな魚は、このままだと、いるかは死ぬだろうと思いました。

小さな魚は、優しい、いるかのことを、とても愛していました。

「いるかさん、このままだと、あなたは死んでしまいます。どうか、わたしを食べてください」

「そんなことは絶対にできない。それに君だって何も食べていない」

と、いるかは答えました。

「わたしは、いつも食べているわ。あなたの目には見えないような、さんごの卵や、その他の小さなものを」

いるかはとても驚きました。自分の目にみえていないものが、この小さな魚の命をささえていることを、初めて知ったのです。

「わたしは、いるかさんに食べてもらいたい。なぜなら、わたしのような小さな魚は、やがて

誰かに食べられる運命だから。それなら、わたしは一番好きな人に食べてもらって、その人の体のなかで、永遠になりたい」

いるかは泣きました。このままだと自分は死んでしまいます。そうすると、この小さな魚を守るものは誰もいません。自分が死ねば、愛する魚は他の大きな魚や、自分と同じような、いるかの仲間に食べられてしまうでしょう。もう何日も何日も、食べていないので、いるかの体は限界でした。

「わかった」と、いるかは言いました。

「愛しているわ」と、魚はいいました。

「愛しているよ」と、いるかも答えました。

ふたりは、しばらくじっと、見つめ合いました。

「さようなら」と、小さな魚が言いました。

いるかは、泣きながら、愛する魚をぱくんと食べました。不思議なことに、やせ細り力のなくなった体がみるみる生き返りました。

いるかは、自分の体の中に愛する魚がいることを感じました。

それでも、いるかは、他のさかなを食べるたびに、悲しく苦しくなりました。でも、このまま何も食べないと死んでしまいます。いるかは、とても辛かったのですが、心の中で「ごめんなさい」と謝りながら食べました。

いるかは心の中で愛する魚に話かけました。

「どうして、こんなふうに、命を奪わないと生きていけないのだろう」

もちろん、愛する魚は死んでしまったので返事はありません。

そうやって、いるかは年老いていきました。いるかがその命を終えようとしてるのを、神様がご覧になっていました。

神様は言いました。

「いるかよ、いるか。もう何も食べないで生きていけるように、お前は星におなり」

いるかは、その神様の声を聞きました。うれしくてうれしくてたまりませんでした。

そうした喜びのなかで、いるかは死にました。

神様は言葉のとおり、いるかを星になさいました。小さな星でした。

ちいさな星に生まれ変わった、いるかに不思議なことが起こりました。小さな星のまわりには、たくさんの惑星があったのですが、そのうちの三番目の惑星に命が生まれてきたのです。いるかは、それが愛する魚の生まれ変わりであることを知っていました。

いるかは言いました。

「愛しているよ」

魚も答えました。

「愛しているわ」